

畿の諸国は、真夏になっても冬のように寒かった。4月下旬から降り始めた長雨が、8月になってもやまなかった。日本全国が、冷害におそわれた。加えて、その天明3年の7月に浅間山が大噴火し、信州(長野県)では約2000人が死んだ。つづく天明4年・5年も凶作がつづき、さらに天明6年(1786年)には、関東各地で大洪水があり、凶作となった。

その被害は、全国に及んだ。関東地方でも、食料がつきた農村では、食べられる限りの草の根(彼岸花も食べている¹⁾)や、木の皮(松の木の皮など)などを食いつくし、さらには、壁土までむさぼり食うという状況となった²⁾。



今日の畦にも残る・彼岸花 1995年10月姫路市

中でも、特に悲惨だったのは、東北地方であった。天明3年から4年にかけての間に、津軽藩(現在の青森県)だけで餓死者10万人、疫死者3万人を出した。他の地方に逃げた者2万人、家族全員が死に絶えたのは3万5000軒もあった。

金持ちは、「ところ」という、おそろしいほどの苦みのある草の根からつくった団子などを買った³⁾。さらに、わらの団子や、松皮の餅などを食べたり、500文で犬1匹、300文で猫1匹を買って食べた。しかし、貧乏人はそうはいかず、餓死した⁴⁾。

天明の4年の南部・津軽の両藩では、死人の肉まで食い尽くした。たとえば、ある村の源次郎の妻は、餓死した14歳の子どもの肉を、夫とともに4日間で食い尽くしたが、後になってから、「じつは私一人で食べたかった」と言ったと記録されている。別の家では、治助という男が、生きている自分の子どもの股にかみついているところを隣人に見つけられている。さらに、他人の死肉を食べて生き延びた16歳の男子が、自分の母親と妹の屍まで食べ、はては人を殺してまでその肉を食べたという記録も残っている⁵⁾。

これが飢饉の実態だった。見せかけの「豊富な食料」の国、今日の日本では考えられない事実だ。一部の支配階級・武士の生活のために、生産力が低く、科学力・技術力も低かった江戸時代の民衆は、このような生き地獄を味わった。

1) 渡辺実『日本食生活史』吉川弘文館 1964年 p. 247。 樋口清之『日本食物史』柴田書店 1987年 p. 242。

なお、彼岸花は毒性のある植物であるが、飢饉の際の非常食として田の畦(あぜ)に植えられていた。第2次世界大戦中も多くの農村で食べられており、昭和時代にも彼岸花で飢えをしのいだ体験をもつ人々が多い。

2) 中島陽一郎『飢饉日本史』権山閣 1981年 p. 49。

3) 「ところの商品化」については、菊池勇『飢饉の社会史』校倉書房 1994年 pp. 169-173。

4) 前掲中島陽一郎『飢饉日本史』p. 65。

5) 前掲中島陽一郎『飢饉日本史』pp. 66-68には、その他の多くの事例が紹介されている。